費孝通著　西澤治彦訳

郷土中国

風響社／2019年3月／272頁／2000円＋税

田村和彦

刊行が待たれていた著作がついに世に送り出された。本書は、中国のもっとも著名な社会学者、人類学者である費孝通の代表作の一つである『郷土中国』（上海観察社、一九四八年）の日本語訳である。このように紹介すると、本書の日本語への翻訳が初めて行われたように受け取られかねないが、後述するように、そうではない。しかし、この新訳を中心に構成された本書は、書評によって検討するにふさわしい内容をもっている。以下、本書評では、先行する日本語訳を意識しながら西澤氏による翻訳『郷土中国』の意義を紹介していくが、その前に本書の構成について触れておこう。

訳者まえがき
凡例
『郷土中国』本編
旧著『郷土中国』再刊の序言
一　「郷土中国」の本質
二　文字を農村へ
三　再び「文字を農村へ」を諭す
四　差序的な構造配置
五　個人間を繋ぐ道徳
六　家族
七　男女に別あり
八　礼治秩序
九　訴訟のない社会
十　無為政治
十一　長老統治
十二　血縁と地縁
十三　名と実の分離
十四　欲望から需要へ
十五　後記
訳者解題（『郷土中国』執筆の直接的な動機――郷村建設と平民教育運動／『郷土中国』執筆のもう一つの動機――海外体験／「差序」と「格局」の字義、および潘光旦の影響／「差序格局」の訳語について／『郷土中国』の位置づけ――人類学か社会学か／『世紀評論』への寄稿と単行本化／初版本と重刊本の異同）
訳者あとがき
索引

費孝通氏の『郷土中国』については、す

でに佐々木衛氏による的確な書評（『民族学研究』五二巻一号、一九八七年）に加えて、同氏による、この時期の費氏の一連の著作群についての優れた考察（『民族学研究』六一巻三号、一九九六年）がある。また、中国を代表する費氏の研究については、本国での大部にわたる論考集のみならず、日本でも繰り返しその広範にして深遠な学問像を描き出す試みが行われてきた（例えば、佐々木衛『費孝通――民族自省の社会学』東信堂、二〇〇三年、愛知大学国際コミュニケーション学会編『文明21』一五号、費孝通先生追想特集、二〇〇五年、聶莉莉「費孝通――その志・学問と人生」趙景達人ほか編『講座東アジアの知識人』五巻、二〇一四年など）。また、後述するように、今回の翻訳書のやや特殊な性格からしても、書評を翻訳のもととなった書籍の解説のみに終始することは適切ではないだろう。よって、中国を代表する知の巨人が、そのもっとも円熟した時期に数多くの重要な問題を提示している『郷土中国』については本書を読んでいただくこととし、本書評では必要に応じていくつかの例を紹介するにとどめたい。

費孝通氏の著作の翻訳としては、博士論文に基づく *Peasant Life in China: A Field Study of Country Life in the YangTze Valley*（中国では『江村経済』の名で知られている）が一九三九年に出版されると同年に日本語に翻訳され、その後も『中国農村の細密画――ある村の記録1936～82』（小島晋治ほか訳、研文出版、一九八五年）に同書の要約と同村の変化をまとめた書籍が刊行されるなど、繰り返し注目を集めてきた。内発的な開発論として重視された一九八〇年代の『小城鎮四記』（新華出版社、一九八五年）もまた、『江南農村の工業化――〝小城鎮〟建設の記録1983～84』（大里浩秋・並木頼寿訳、研文出版、一九八五年）として、興味深い解説（阪本楠木彦氏）、「小伝」（大里浩秋氏）とともに日本の読者へと広く紹介されている。このように、対象としての中国農村が大きな関心をもって早くから受け入れられたことに比べると、「我々が事物を認識する際の工具となる」、「ある社会の具体的な描写ではなく、具体的な社会の中から抽出したいくつかの概念からなる」（本書「旧著『郷土中国』再刊の序言」）本書の日本語への翻訳は大きく遅れることとなった。

その意味で、本書刊行の意義は、まずひとつ目に、中国語を解する研究者には非常に著名であった本書が一般の書店で購入できるようになったことである。このように述べると、何を当たり前なことを、と思われるかもしれないが、この意義は大きい。

『郷土中国』が日本語に初めて翻訳されたのは、「中国史上における「民族」の問題」グループ（鶴間和幸氏、市来弘志氏、上田信氏、川上哲正氏、武内房内氏）によるものであり、その成果は『学習院大学東洋文化研究所調査研究報告』（No.四八、二〇〇一年）に掲載されている。また、二〇〇一年から二〇〇四年にかけて高知大学の蕭紅燕氏によって、翻訳が発表されている。これらの翻訳にはそれぞれ特徴があり、評者も授業で『郷土中国』を輪読する際には、大いに助け

られた。費孝通氏の文章は、平易な言葉で叙述しつつ含蓄に富んだ議論であることから、翻訳の作業は大変困難であったことが推察され、その熱意と到達した水準は敬服すべきものである。しかし、いずれも紀要などの一般に入手しがたい媒体であったことは否めず、またごく一部については誤訳、意味をとりにくい文章が残っていた。『郷土中国』と前後して出版された『生育制度』（上海観察社、一九四七年）が、中国での再刊から間もない一九八五年に横山廣子氏の丁寧かつ的確な翻訳によって出版されていることを考えれば、『郷土中国』の翻訳は決して早いものではなかった。『生育制度』が人類学の親族議論を踏まえた中国の事例による独創的な社会の再生産に関する議論であったとすれば、『郷土中国』は、当時の社会情勢のなかで中国社会の構造を考察する知的営為の結晶である。その結果、人類学以外の専門をもつ研究者たちからも繰り返し参照、言及されてきた。実際に、最初の邦訳が歴史学者を中心とするグループから公開され、その全貌を広く日本に紹介されている点はこの状況を反映している。このように広い関心を集める著作が、書店で扱われて広く人々の手に渡るようになり、多くの専門分野の人々に容易に触れられるようになったことは、大きな意義と言わねばならない。

二つ目に、様々な重要な概念が、その全体像とともに検討される俎上に載せられたことがあげられる。本書の提示した概念のうち、もっとも頻繁に言及されるものは「差序格局」であろうから、これを例にとってみたい。メンバーシップによる区分ではない、この伸縮的でありかつ立体的な人間関係の把握は、同じく個人を重視した林耀華氏による親族研究での指摘をより概念的に説明することを可能とした。その後の人類学においては、親族以外の研究領域の活性化などの影響のもと、近年までこの概念は、引用されることはあれ、深化されてきたとは言い難い状況にあった。しかし、エージェンシーなどの新たな概念と、一方、日本では王菘興氏や末成道男氏によりかつて提起されていた、人々の紐帯のありかたへの指摘と響きあいながら、今日再び中国に関する人類学においてその重要性を再認識されている（例えば、日本においては、秦兆雄『中国湖北農村の家族・宗族・婚姻』風響社、二〇〇五年、川瀬由高『共同体なき社会の韻律――中国南京市郊外農村における「非境界的集合」の民族誌』弘文堂、二〇一九年）。費孝通氏の論考には、氏独自の造語が多く、それぞれに重要な位置を占めており、「差序格局」は極めて重要ではあるが、全体のなかではその一例に過ぎない。このように、西洋由来の概念を一度十分にかみ砕いたうえで、中国の事例をよりよく説明可能な形で概念化していく手法は、社会学の中国化を推し進めた燕京大学派、とくに呉文藻氏以来の流れを想起させるものだが、本書中の造語それぞれの関連性を一望できるように全体が訳されている点は、読者として大変にありがたいことである。そのうえで本書では、先行する邦訳以上に、こうした用語法、造語について徹底的ともいえる検証、考察が施

されている。

その徹底さが顕著に表れているのは、本書の体裁である。これを本書の意義の三つ目にあげたい。本書には、先述のように、費孝通氏の文章の含意を読み解くうえで重要であると思われる用語や造語、社会背景について、膨大な訳注が振られている。そのボリュームは圧倒的であり、一般的な翻訳を超えた訳者の執念を思わせるものがある。加えて、翻訳としては長文になる「訳者解題」は、それ単体でも優れた論考となっており、このテキストの位置づけを紹介し、時代背景を丹念に検討し、提起された諸概念を整理する内容となっている。この、翻訳にあたって詳細な注を施し解題を加えていくスタイルは、訳者らの手になる英語・中国語による重要論考の翻訳集『中国文化人類学リーディングス』(瀬川昌久・西澤治彦編訳、風響社、二〇〇七年)に通じるものがあるが、本書の解題はより入念である。例えば、初版本(一九四八年)と重刊本(一九八五年)の異同を逐一検討する、雑誌連載時の掲載順と、書籍化にあたっての再構成と改編の関係を明らかにするなど、これまでの人類学的な作業では決して重視されてこなかった検証に踏み込んでいる。『郷土中国』の特徴として、大量の中国古典を引用しつつも、時にユーモアを感じさせる表現や流行事象が取り込まれている文章を指摘できる。この特徴は、当初の発表媒体が雑誌であったことのみによるものではなく、当時の人々であればそれぞれが思い当たる節のあるような、読者の存在を強く意識したゆえの工夫であったと想像される。しかし、その文脈自体がすでに現在のわたしたち読者に共有されていない。そうであれば、この詳細な注釈は、読者を当時の文脈へと帯同してくれる重要な手がかりとなっているのである。

最後に、評者の関心から二点ほど感想を述べてみたい。

この労作の結果として鮮明になった事象の一つとして、様々な、図柄と地ともいうべき記述と背景、いわば、当時の社会状況とそれに対する応答としての『郷土中国』という点がある。繰り返し指摘されてきたように、また、費氏自身でも述べているように、本書には同時代のアメリカにおける人類学の影響、とくにM・ミードによる社会分析のそれが散見される。そのほか、西澤氏が注と改題において詳細な紹介をおこなっているように、冒頭の文字をめぐる問題は、まさに同時代に進行していた晏陽初氏らを中心とする社会改革のもつ中国社会認識への批判となっている。そして、もっとも重要な指摘は、「差序格局」概念もまた、費孝通氏の非常に親しかった社会学者である潘光旦氏の議論を踏まえているということを関連する論文との関係のなかで指摘したことである。日本では一般に潘氏の研究については、優生学者としての側面が紹介されることが多く、圧倒的な古典知識を動員した生物学と社会学を融合させるような家族論や道徳論、社会と「人」についての考察はほとんど紹介される機会がなかった。西澤氏は、本書の解題のなかで、翟学偉氏や聶莉莉氏の指摘を踏まえて、この造語に関する着想の来源と費氏のオリジナリティを明らかに

している。その結果、人類学の分野で繰り返し言及される「差序格局」がどのような文脈で洗練されてきたのかを改めて問うことができるようになった。

評者は偶然、潘光旦氏生誕百周年の際に北京大学社会学人類学研究所に居合わせたことで彼の学問領域を超えた思索の一端に触れて啓発を受けたが、潘氏の文章は費氏よりさらに難解であり、評者の教養が及ばず読解することが極めて困難なまま立ち止まっている。『郷土中国』をここまで精緻に解読した翻訳者である西澤氏が、今後わたしたち読者をこの偉大な学家を理解するための考察へと導いてくれることを強く希望する。

もうひとつの関心事は、中盤から後半にかけてこの論考が執筆された動機と展望について、である。文字の議論が平民教育運動への批判的応答であることはすでに述べた。そうであれば、中盤以降の人間関係や道徳、規範と展開する議論、そして単行本化に際してあえて時勢的権力を論じた「名と実の分離」、「欲望から需要へ」の章を加筆して、知識と権力との問題を繰り返し提起した費氏の脳裏には、内戦終結の後を見据えた新たな社会像があったと考えられる。その一部は、具体的な社会再建のための提言としての『郷土重建』（上海観察社、一九四八年）において著わされている。しかし、この後半部に関する本書の解題は、平民教育運動との関係が詳述されていたことに比して、やや手薄になっている感がある。中華民国末期の費氏の研究文脈のなかにこの問題を位置付ければ、ありうべき社会の構築に向けた氏の展望の一端をうかがい知ることができる。ここで提起された問題を受け止めていくことは、氏の思索に刺激を受けた読者に今後の課題として残されている。

ただし、その道行も、決して暗闇を恐る恐る踏み出すようなものではない。というのも、そのための有力な道しるべとして、わたしたちはすでに、その後の費氏の思索について、丹念な一次資料の検討からなる聶莉莉氏『知識分子の思想的転換――建国初期の潘光旦、費孝通とその周辺』（風響社、二〇一五年）を参照することができるからである。加えて、本書「訳者あとがき」によれば、長年にわたって日本に費孝通氏の紹介をされてきた佐々木氏による『郷土重建』の初邦訳も準備されているという。こうした状況下にあって、早くも一九八〇年代から中華民国期における人類学の研究状況を整理し、林耀華氏へのインタビューをおこなうなど中国人類学の黎明期に着目し続けてきた、また、費氏の故郷である江蘇省で調査を進めてきた西澤氏による『郷土中国』の翻訳出版は、じつに時機を得たものといえる。

本書が、費孝通氏の代表作の一つである『郷土中国』日本語訳の決定版として、また、その全体像を照らし出す基盤となる研究として、今後も繰り返し参照される起点となることは間違いないだろう。